
The Shop@ブームの冒険

プレイブ&秋留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Shop@ブームの冒険

【Zコード】

Z0329D

【作者名】

ブレイブ＆秋留

【あらすじ】

ホビット族のブームは夢を叶えるために小国モノリスにたどり着いた。イクシム大陸の東の端の島国。その国の存在を知る者は少なく、国の人口も少ない。そこでブームは武器屋を始める事に決めた。

プロローグ

知る人ぞ知る小国モノリス。特に名産もなく、観光場所と呼ぶにも殺風景なこの国に、一人の男が大きな鞄を抱えやって来ていた。モノリスの城下町は城下と言つにはあまりにも城から遠い場所にあり、ひつそりと人々が生活している。

国と言つても、一応城があり民が居るだけであまりにも小さい。地図にも一応載つてはいるが、すぐに場所を差せる人は殆どいないだろう。イクシム大陸の東の端にある、小さな島にその国はあった。島には城と城下町の他に、これまた小さな町が一つあるだけで、他は自然に囲まれた後進的な島だ。

他の国との交流は殆どなく、自然の恩恵と家畜だけで国の需要は賄われている。暮らす人々は穏やかで、奔放な性格をしている者が多い。

男は重い鞄を下ろし、高台から城下町を見下ろした。動く小さい棒切れのような何かが見えるが、あれはきっと城下町に住む人々だらう。

男は目を細め、より一層注意して城下町を眺めた。民は急ぐわけでもなく、各自の仕事を黙々とこなしているようだ。ぽつぽつと建つた家は人口の少なさを窺わせた。

遠くに城が見えるが、遠近感を考慮しても随分小さく、やはり小国なのだと言つことを男は再確認する。

男は鞄を抱えなおし、城下町に向かつて下り始めた。
「私の店をここに建てよ!」

「ブームさん、ブームさん。木刀が欲しいのですが」
目の前に居るのは、既に常連となつたトリム。ガイア教の司祭だ。ブームとトリムの目の高さには変わりはないが、ブームは人間の

サイズに合わせた店のカウンターに、脚立のようなはしご付きのイスを置いてそこに座っている。

人間の子供の身長くらいで、おっさんの顔つきをしたブームはホビット族だ。

「ああ、いいですよ。好きなのを選んで行ってください」

そう言つとトリムはいつも真剣に武器を選ぶ。この店には、大概同じ種類の武器が数個置いてあるので、来る客にはその中から一番良さそうな武器を選んで貰つていた。

たまに「どれがいいですかね?」とか聞いてくる客もいるが、粗悪品を扱つていらないブームの店ではどれも大して変わらない。

「これが良さそうですね」

トリムも適当な物を選んだようだ。どれを選んでも大して変わりはないが、持つたり握つたりした時の感じは微妙に違う。ブームは客にはそのファイット感を選ばせているのだ。

「おいくらでしたっけ?」

「十カリムだよ」

言つて客を眺める。一目でガイア教のものと分かる服に身を包んだトリムは、懷から皮のサイフを取り出し、十カリム紙幣をカウンターに置いた。

「この町には武器屋がなかつたから、ブームさんのおかげで助かりますよ」

人懐っこい性格が顔に表れている。この客は大抵長話をして帰つて行くのだ。

「隣町にはあるつて話ですよね」

「そうそう! 僕はいつもそこまで買いに行つてたんですけど、世の中物騒ですから」

一九九九年に勃発した第三次封魔大戦で、勇者ノアが魔王を打ち滅ぼしてから四十年経つた今でも、この世界には魔族やモンスターが溢れていた。

いつの時代も人間と魔族はいがみ合い、殺しあつて生きてきた。

きっとこれからもそうだろう。

「私はやっと慣れてきましたよ。でもやはり、外に行く時はモンスターに注意しないといけないですね」

「そうですよ、油断は禁物です。私達司祭がいつでも助けに行けるとは限らないのですからね」

ブームが仕入れに出ている先で出合つと、トリムは親切にも回復魔法を掛けてくれる。ブームはそれで何度も助けられているのだ。

「はあ…、気をつけます」

三十五歳にもなつて、自分よりも若く見える司祭に諭されていると言つのも情けないものがあるが、ブームは素直に首を振つた。実年齢よりも老けて見える顔に落ち込んだ表情が走る。

「そう言えば、ブームさんはトーテム山の方に仕入れに行つているんですよね？」

唐突な話題にブームは首をかしげた。話題どころか、トーテム山と言つものがどこだか、ブームは知らない。

「……トーテム山？」

今いるモノリスの城下町に来る時に高台からあたりを見回したが、そんな物はなかつた筈。ブームは記憶を手繰り寄せた。見渡す限りの森に囲まれるよう、町と城があるだけの光景が、瞼の裏に浮ぶ。「トーテム山つて言つのは、町を出て西にある小高い丘の事ですかね」

「ああ、私が通つてきた所です。高台か、丘だと思つてました」

「あはは。まあ、何でもいいんですけどね。あそここの山には、大工一家が住んでいるのですがね。それが私の知り合いで、ブームさんがそつちに仕入れに行くつて話をしたら、頼みたい事があるって…頼みたい事？」

ブームは再び首をかしげた。大工が武器屋に何の用があると言つただのうう？

「近いうちに来ると思いますから、よろしくお願ひします」

返事をする間もなく、トリムはそう言つて店を出て行つた。

プロローグ（後書き）

ゲーム『The Shop2』の最初のマップを小説にしてみました。

ゲームをプレイしたことの無い人も、これを読んでプレイしていただけだと思います。

第一章 依頼

その日もブームは武器を磨きつつ、たまに来る客をさばいていた。武器屋を開いたばかりだから、客の入りはあまり良くない。それでも固定客が何人かついてくれているのが、ブームにはありがたかった。

人間用の武器、特に長剣や斧は身体の小さいブームが持つのには大きすぎ、磨くのだけでも精一杯だ。

武器の仕入れに行く時も、それらが多いとブームは必死の思いで籠を背負わなくてはいけなくなる。その分、売れたときの嬉しさも倍なのだが、なかなか買い手もいなかつた。

「ガラン、ガラン」

店の入り口の扉につけた鐘が音を立てた。今日で四人目の客が來たようだ。太陽は既に傾きかけていると言つのに、まだ四人目だといふのが寂しいが、ブームは武器から目を離して入り口を見た。

「あんたがブームさんかい？」

入ってきたのは常連客ではないようだ。来た客全てを覚えているわけではないが、知つた顔でもなかつた。

「そうだが、何か入り用ですか？」

店の名前が『ブーム武器店』なため、ブームの名前を知つてゐる事自体は不自然ではないが、入り様に名前を確認してくる客はいない。

ブームはいぶかしげに返事をした。

「初対面で申し訳ないのだが、頼みがあるんだ」

目の前の男は、唐突にそう言つた。

そう言えども、司祭のトリムが大工が来ると言つてゐた事を思い出す。良く見ると、確かに大工の格好をしている。

「ああ、トリムさんの言つてた方ですね」

「知つてゐるなら話は早い。トーテム山にいる大工から、特製金鎧

を貰つてきて欲しいんだ」

トーテム山は、ブームが普段仕入れに足を運んでいる辺りだ。ブームは特に断る理由もなく、首を縦に振つた。

「そらくなら別に構わない。明日に丁度仕入れに行くから、その時に寄つてくるよ」

「すまないな。」コウンからと書いて、この手紙を見せてくれば棟梁に会えるはずだ。じゃあ、頼んだぜ」

「コウンと名乗つた男は茶色の薄い封筒をカウンターに置いた。そして、来た時と同じように店の扉の鐘を鳴らしながら帰つていった。「あ……、金槌を渡す方法を聞いてなかつた……」

ブームは慌てて店を出たが、コウンは見当たらない。

「まあ、そのうち来るだろ」

楽天的に呟くと、ブームは店に戻つた。

「ちゅん…ちゅん…」

外からスズメの可愛らしい鳴き声が聞こえてくる。ブームは静かに目を開けた。カーテンの隙間から入り込んでくる光が、ブームの寝床を暖めている。

「うーん…」

ブームは思いきり身体を伸ばした。ホビット族であるブームの身長は、人間の男性の胸あたりまでしかない。

ブームは小回りの利くこの身体を気に入つていたが、仕入れなどで長時間歩くような時には不便だと思う。

暖かい寝床から出たくない気持ちをグッと我慢し、ブームは立ち上がつた。

「今日は仕入れに行かないとな」

昨晩のうちに、仕入れの準備はしておいた。あとは、自分の準備が終われば店を出れる。

眠い頭を起こすために冷たい水で顔を洗い、ブームは手馴れた様

子で朝食の準備をした。人間のサイズに合わせた店の内装とは違い、自宅はブームの使いやすいホビット族サイズだ。

ここに店を構える前は同じイクシム大陸にあるサボーと言う町で、人間の妻と十歳の娘と共に暮らしていた。だが、ブームは子供の頃からの夢だった武器屋を経営する事を選んだ。

成功するかどうかも分からぬ苦しい生活を妻達に送らせるわけにはいかないと、ブームは一人モノリスに来た。

店を建ててから半年近く経過したが、家族の写真に話し掛けることをブームは欠かしたことがない。

毎日、朝食前と就寝前に朝の挨拶や一日にあつた出来事などを報告している。仕入れ時に拾つた武器のリストを娘のために作ることも忘れない。

今は一人だが、ブームは家族の事をとても愛していた。

「二人ともおはよう。今日は仕入れに出掛けてくるよ」

ブームは写真に向かつて満面の笑みを浮かべた。写真の中では背の低いブームの横に、人間にしては背の低い妻が娘をその腕に抱いて立つている。

写真からの返事はもちろんないが、ブームには目の前で微笑んでいる妻の返事が聞こえるような気がした。

そうして簡単な食事を取ると、ブームは店を出た。扉につけていれる札を『閉店』から『仕入れに行つてます』に変更する。

帰つてくる頃には肩に背負つた籠が一杯になつていてことを祈り、ブームは町の外へと足を進めた。

モノリスからトーテム山へ行く道は、一応舗装された道が続いている。道の脇には木々が生い茂つていて、奥に入り込んだら迷つてしまいそうだ。

モノリスには魔族討伐組合…いわゆる冒険者斡旋所がないが代わりに自治体がある。街道沿いを歩いているとたまにすれ違う冒険者風の人たちは自治体の一人なのだろう。

だが、まだ日が出たばかりの朝っぱらから町の外を警護している人は見当たらない。この時間では馬車も通らないだろう。

トーテム山までは約三時間の道のりだが、その間にモンスターが出ると自分で戦わなければならない。

普通、商人が仕入れに出るときは警護に人を雇うのだろうが、ブームにそれほど蓄えがあるわけもなく、毎回危険と隣り合わせの仕入れを行っていた。

お陰でこの辺のモンスターとは互角以上に戦えるだけの力がついた。

ここに来てすぐの頃は仕入れに行くたびにモンスターにやられ、通りかかった馬車に助けられてばかりいた。トリムに助けられた回数も相当なものだろう。

戦闘に慣れた今は怪我を負うこと自体が少なくなっている。油断は禁物だが、トーテム山までなら何とかなるだらう。

「お！ あれは！」

何気なく見た右手の木々の隙間にブームは武器を発見した。草の陰から柄の部分が少し見えている。

ウキウキした顔をして武器に近づき草を搔き分けると、鞘に収まつた刀が落ちていた。

「こ……これはっ！」

鞘から刀身を引き抜くと、黄金色に輝く直刃の刀身が姿を現す。

「ササニシキか。状態も良好だし持つて帰つて売るしよう」

鞘についた泥汚れを手で払い落とし、ブームは持ってきた籠に刀を入れた。そのままだと動いて危険なので、縄で軽く固定する。

ササニシキはブームが扱っている武器の中では高い方なので、自然と顔が綻んだ。

「幸先がいいな」

少しだけ重くなつた籠を背負い、再びトーテム山へ向かつて歩き出す。

ブームの武器の仕入れは、どこかの鍛冶屋や武器屋から買いつけ

を行うのと違い、道に落ちている武器を拾うのがメインだ。

道から少し逸れた場所では、モンスターや冒険者が落としたであろう武器が見つかることがある。ブームはそれを見つけて店に出售している。元値がタダだから安く品を提供できるという仕組みだ。

ブームは不良品を見つけても持つて帰り、店で処分をしていた。もし置いて帰つても次に来た時にまた見つけ、がっかりするのが目に見えているからだ。

お陰でブームが通つた後の道は、余計なゴミの落ちていない綺麗な道路になつていた。

「こ……これはっ！」

再び何か光るもののがブームの手に入った。武器には装飾が施されているものが多く、光っているものがあればブームは手間を惜しまず確認する事にしている。

「綺麗な色した石だ。まあ、所詮タダの石だが……」

がつかりしたように肩を落とし、ブームは小さく呟いた。そんなにすぐに武器が見つかるような、ブームは苦労していない。何度も気になるものを確認し、その都度喜んだり落ち込んだりしているのだ。

「シユツシユツ！」

突然、後ろから風を切る音が聞こえたと思つと、ブームの身体が反転した。田から星が出るような衝撃がブームを襲う。

クラクラする頭を押さえ先ほどブームがいた辺りを見ると、カブト虫を人型にしたようなモンスター、空手カブトがジャブをしながら立つていた。どうやら石に夢中になり過ぎていて、モンスターが近づいてくる気配に気づかなかつたようだ。

ブームは辺りに意識を走らせ、他にモンスターの気配がないことを確認すると、少し後ろに下がり空手カブトから間合いを取つた。同時に背負つていた籠も適当に下ろす。

空手カブトは尚もジャブをしながらブームへ近づいた。名前に空手という言葉が入つているのに、動きはボクサーそのものだ。ブーム

ムは慎重に下がりながら、尻の右部分に差してあつた金槌を手に持つた。

「シユツシユツシユシユシユ」

素振りの音が少しずつ早くなつたかと思つと、四本ある腕のうち身体の左にある一本の腕を規則的に繰り出しながらブームの周りを回りだした。

どうやら牽制をしているらしい。モンスターから目を離さないようにはブームもその場でグルグルと回つた。

「シユシユシユシユ！」

ブームの背中から一滴、汗が流れ落ちた。

仕掛けるつもりがあるのかないのか、空手カブトは依然ブームの周りを回つていた。

（いい加減、目が回りそうだ）

ブームはそんな事を考えていたが、笑い事ではない。先ほど頭に食らつた一発と、このグルグル目回し攻撃で、ブームの足元が覚束なくなつてきている。

このまま回ついたらモンスターを撃退するどころか、反撃する事すら出来そうにない。

ブームは焦つて自分から仕掛けることにした。

「うおおおお！」

金槌を振りかぶり、空手カブトに向かつて突進する。突然の行動に空手カブトはびっくりして足を止めた。

「うわああ」

だが勢い良く出たのは良いものの、もつれた足が木の根っこに引っかかり、ブームはそのまま空手カブトに向かつて倒れこんだ。

「あうつー！」

「ニギヤー！」

ブームとモンスターの悲鳴が重なつた。空手カブトは氣を失いその場に倒れている。

偶然ブームの持つていた金槌がモンスターに命中したようだ。ブ

ームが倒れこんだ勢いを吸収する形で攻撃を食らったのだろう。

「ふう。危ない危ない」

少し田が回りクラクラする額を押さえ、ブームは田を固くつぶつた。

「やはり、油断はいけない」

今回は運よく勝てたが、次回もそうだとは限らない。ブームは籠を背負うと田的田指して歩き出した。

空手カブトにギリギリ勝つてから休憩を入れながら歩いて来たせいか、田は頂上田指して昇つてきている。腕時計のような高価なものを持っていないブームは、田の高さなどから経過時間を把握していた。

「この調子で行けば、もう少しでトーテム山だな」

誰に言つわけでもなく、ブームは一人呟いた。

冒険者のようにパーティでも組んでいれば喋りながらの楽しい道中になつたかもしれないが、生憎ブームは冒険者ではなく、警護の人間も雇つていらない。

客と話す以外の言葉は、殆ど全てが独り言だつた。

「どうこいせつと」

ブームの背中にある籠も半分以上埋まり、足が疲れてきていた。ブームの短い足は歩くのに適していないのか、何かにつけて躓いた。お陰でブームの前半分は泥でひどく汚れている。

それでもブームは歩くのが大好きだ。たまに落ちている食べ物を食べてみたり、落ちている武器を拾つたり、落ちているカリムを拾つたり……。落ちている何かを見つけるのが、ブームは得意だつた。落ちている食べ物を食べて、何度か中つた事もある。何かの生き物の糞を触つてしまい、しばらく臭かつた事もある。モンスター用の罠に掛かり、カリムを落としたこともある。

でも、ブームは落ちている物への興味を失くさなかつた。それが

今の商売に繋がっているのだろう。ある意味、自分の特技を生かした最適の職業なのかもしれない。

催促するかのように腹が鳴った。昼飯の時間にはまだ少し早い。

ブームは鞄の中に入っているお弁当に思いを馳せた。

「大工がいる所に着いたら、飯にするかな」

「飯？ 飯はお前だ！」

ブームの真上から声が聞こえると同時に、木の上から何かが落ちてきた。ブームはとつさに前に走り、それを避ける。

枝と葉っぱを撒き散らして降つて来たのは、人型の豚のような猪のような見た目のモンスター、オークだった。少し高めの人間サイズの身体は緑の毛に覆われ、不恰好な二又の槍を持っている。

「不味そなうだが仕方ない、我慢するか」

オークは少し顔を歪めて言った。

「食われてたまるか！」

ブームは武器を縛つてある縄を手早く解き、先ほど仕入れ中に見つけたトライデントという武器を手に取った。

槍には槍を！ と思い、手に取ったは良いが使った事はない。

「ほう。なかなかいい武器を持つ…」

「とりやあー」

オークの台詞が終わらないうちに、ブームは先手必勝とばかりに槍を突き出した。

「どわつ！」

オークの着ている薄くてボロイ布は簡単に貫かれ、オークの脇腹に穴が開いた。

「この卑怯者！ 痛えじやねえか！」

腹から血をダラダラと垂らしながら、オークは叫んだ。

「戦闘に卑怯もクソもあるかつ！」

負けたら食われるような戦いで、正々堂々と戦うと思っている方がおかしい。ブームは尚も槍を突き出し、オークを威嚇した。

「くそつ！」

オークは餌だと思っていたモノから思わず反撃に怒り狂い、めちゃくちゃに武器を振り回した。

ブームはその攻撃を後ろ一歩さがつて回避する。

「逃げるな！」

「逃げないでか！」

ブームはそう言ひと、一目散に走った。逃げれる時は逃げるに限る！ 今までの経験でブームが培つた知恵だ。

「待てっ！ クソが」

（クソを追うな、クソを）

走りながら心の中で呟いたが、腹に開いた穴を押さえつつブームを追つてきている。

ブームは自分がホビット族で、人間より足が短い事を少しだけ恨んだ。しかも背中の籠は肩に食い込む程重くなつていて。ただでさえ遅い逃げ足が、一段と遅くなつていた。

だがオークの方も腹の傷が響くのか、ぐつたりと走っている。二人は傍から見るとふざけて遊んでいるかのような遅さで、追いかけっこをしていた。

「ハアッ…ハアッ」

舗装されている道とは言え、疲れている状態から走り出したブームは、すぐに呼吸が上がつてきていた。

額から背中から垂れてくるじつとりした汗も冷たくなり始め、ゆつくりとした走りとは裏腹に加速するように体力が消耗していく。

それはオークの方も同じだった。脇から出る血は、身体を動きに合わせ湧き水のように溢れ出ている。生命力そのものが出て行くかのように、オークの顔色が青ざめ始めていた。

「ハアッ…ま…待て…！ ハア…」

そこまでして追いかける必要はオークにはなかつたのだが、自分より身体の小さい、ましてやホビットなんかに逃げられたとあっては、今後の人生に暗い影を落としかねない。

既に意地だけで目の前の獲物を追っている。オーク自体その事を

良く解つていいのだが、それでも諦めるわけにはいかなかつた。

「あつ……！」

道を塞ぐように巨木が横たわつてゐるのが見え、ブームは小さく声を漏らした。

「ふはつ！……もう逃げられない……ようだな。ハア……大人しく、俺の腹に收まれ！ ハアハア」

ブームはちらりと後ろを振り返り、また前を見た。健康的に太い枝の沢山ついた木の前の木は、ブームには……いや、追つてくるオークですら簡単には越せそうにない。

頭ではそうわかつていても、必死の形相を浮べ一段と怖い顔つきをしているオークと戦うのもかなり嫌なものがある。

ブームは諦めきれず、何とか越せそうな場所がないか木に目を走らせたが、期待は無残にも打ち碎かれた。

仕方なく、再度オークの方へ振り返りトライデントを構えた。そして荒い呼吸を整えるために、大きく深呼吸をする。

「悪あがきはよせ！ ハア……大人しくしていれば、一思いに食らつてやる」

オークも槍を構え、デカイ口を開けながらブームに近づいた。そして二又に分かれた不恰好な槍の先端を、ブームの喉元目掛けてビシッと突きつける。

ブームの後方には巨木があるので左右に避けるしかない。ブームは身を翻して左側に避ける。だが、その行動を予測していたのか、オークは更に突きを繰り出した。

ブームは槍でオークの獲物を弾き、狙いを外す。

身長差のある二人の攻撃はお互い中段に構えているというのに、狙いが大分違つた。両方とも急所だと言う事に変わりはないが。

弾ききれなかつたオークの槍はブームの頬をかすり、じわりと血がにじんだ。ブームは気にもせぬ逆に攻撃を仕掛けた。どこにそんな体力が残つてゐるのか自分ですら理解できないままに、何回も何回も腕を突き出しては引く。

その動きにオークは左方向へ飛び、更に後ろに下がった。

「ま…まさか…」

オークの背後には巨木が横たわり、そして運の悪い事に枝と枝の間にすっぽりと収まっている。

「形勢逆転だな」

ブームは小さく呟いた。

「こ…こんな奴に…。うおおおおああああ！」

オークは叫び、槍を振り回す。狭い隙間では思うように身体が動かせず、オークの腕が枝葉で擦り切れていく。

二又の槍をブームは難なく自分の槍で絡めとり、弾いた。

金属の擦れあう音と共に、オークの持っていた不恰好な槍が弾き飛んだ。オークは思わず自分の手元を見る。何も握られていない、毛深い手の平がブームにも見えた。

「う…うわあああ！」

オークは悲鳴を上げてブームに向かつて…いや、唯一の逃げ場に向かつて突進した。ブームは悠然と槍を構える。

嫌な手ごたえと共に、オークの腹がブームの持っていた槍に突き刺さった。フォークでステーキ肉を突き刺すのとは違う弾力のある感触が、ブームの腕に伝わる。

「嫌…だ。死に…たくない…」

そう言うと、オークは大きく一回痙攣した。同時に腹から血が溢れ、オークは力尽きた。

ブームはおもむろに槍を引き抜き、オークから離れる。心臓が高鳴っている。

「ハアツ…ハアツ」

呼吸が激しく、身体がブルブルと震え始めた。

モンスターを殺すのは、これが初めてではない。だが、人語を操るモンスターを倒したのは、これが初めてだった。

「ううつ」

ブームは心底怖くなつた。いや、オーカが現れたときから、物凄

く怖がっていた。強気な振りをして攻撃を仕掛けたりしたが、正直、死を覚悟してでの事だった。勝てるとは思っていなかつたのだ。

気付けば嗚咽と共に涙が溢れてきている。ブームはそれを拭きもせず、一人が走ってきた道を見つめてぼーっと佇んでいた。

そこにはオークの血が道しるべのようになびいていた。

「よく来たな！ ブームさんの噂は聞いているよ。しつかしまあ、あのオークを倒すとは驚いたわい」

トーテム山の中腹にある大工の家に着くなり、ブームは質問攻めにあつていた。

オークが持つていた不恰好な一又の槍…よく見ると折れたトライデントだったのだが、それを持っていたお陰で、武器も作れると言う大工の目に留まつたようだつた。

正直にオークに襲われたこと、そして倒した事を話すと、大工は奥にいた棟梁を呼んで盛大にブームを歓迎してくれた。

料理と酒が振舞われ、ブームはお弁当を持ってきたことを頑張つて頭の端に追いやつた。

「オークが暴れてたせいで、ここんとこ仕事にならなくて困つてたんじやよ…」

そう言つと、ブームに酒を勧める仕草をする。

「はあ…。なんだか知らないうちにお役に立てたようで、良かつたです…」

ブームは酒の入つた杯に口をつけ、一気に飲み干した。

「お、いける口かい。ささつ、どうぞどうぞ」

棟梁は尚も酒を注いできたが、ブームは少しだけ口をつけ杯を下ろし、料理を食べた。

疲労と空腹のピークに達した身体は、食事を必要としているようだつた。ブームのために出された山の幸をふんだんに使つた料理は、あつという間に胃袋に収まる。

棟梁は黙つたままブームが食べるのを見つめていた。たまに思い出したかのように酒とつまみを口に運ぶ。

身体が急激に回復していくのをブームは感じていた。

「今日、ここに来たのには理由がありましてね……」

最後の一 口を飲み干すと、ブームはようやく本題を切り出した。

「ん？ 店を増築するんですかな？ それとも武器でも作るんですか？」

その言葉にブームは首を振つた。

「いえ、そう言つ事ではなくて……」

「はて？ うちに出来る事と言つたらそれくらいなんじゃが……」

齢五十は越えたであろう、立派なヒゲを持つ棟梁が首をかしげた。「ゴウンさんから、特製金槌を預かってきて欲しいと頼まれたものでして」

「特製金槌ですか？ あれはウチの組に伝わる大事な物で、ホイホイと人に渡せるものじゃないんですがね。ブームさんなら、まあ、いいでしょ。誰か！ 金槌を持ってくれ！」

後ろにある作業場に届くよう大声で棟梁は叫んだ。「へい」と誰かの返事が聞こえる。棟梁はブームの方に向き直ると、日々の仕事で太くなつた無骨な腕を組んだ。

「アレは、元気にやつてますか？」

突然の言葉に、アレの意味がブームには分からない。

「あ、ゴウンはワシの息子なんじゃよ」

棟梁は困つたように笑いながらブームを見て、酒をグイッと煽つた。つられてブームも酒を煽る。

「あまり話はしてないですが、健康そには見えましたよ

正直、この依頼を受けた事が信じられないくらいゴウンとの面識はなかつたが、そんなことはおくびにも出さず、そう応えた。

「ふおつふお、健康そうだつたか。あれはそれだけが取り柄での遠く離れた子供の事を話す親は、みんな優しい顔をする。ブームは少しだけ娘の事が頭に浮んだ。

「棟梁、これを」

作業場から出てきた大工は金槌を渡すとブームに軽くお辞儀をし、作業場に戻つていった。

「これが特製金槌じや。代々棟梁だけにその特殊な製造方法が知られる、大事な金槌じやよ」

何の石で作られているのかはブームには解らないが、少し大きめで黒い以外は普通の見た目の金槌だつた。

ブームはそれを受け取ると、席を立つた。

「もう、帰るのかい？」

「そうですね。あまり長居をすると暗くなつてしましますし」すでに三時を越えていて、これから三時間かけて元の道を帰るとなると、今から出ても遅いくらいだ。

「親子揃つて世話になつたの」

改まつて棟梁が薄くなつた頭を下げた。

「いえいえ。大したことはしてないですよ」

とはいえ、死ぬような目には合つたのだが。そんな事は言わない。

「何か入り用があれば、ここを訪ねてくれ。大工や鍛冶のことなら力になれるぞ。外に馬車を呼んでおいたから、それで帰ると良かろう」

行きの道で色々あつたため、その申し出はありがたかった。ブームが乗り込むとゆつくりと馬車が出発した。

大工の家が次第に遠くなつていいく。馬車の心地よい揺れに身を任せ、ブームは静かに目を閉じた。

戦利品リスト

- ・ブーメラン × 3
- ・こん棒
- ・バタフライナイフ
- ・ボーガン × 2

- ・爆弾岩
- ・チャクラム
- ・ササニシキ
- ・鉄扇
- ・トライデント × 2 (ひとつはオークが所持していた壊れてい
る槍)
- ・綺麗な石 × 4
- ・420カリム (拾った)
- ・腐つたお弁当 (せっかく作ったのに食べれなかつたのが悔や
まれる)

「これだよ、これ！」

「ゴウンは特製金槌を取り、しげしげと眺めた。

「娘が病氣で家を抜けられないし、特製金槌にもガタがきて仕事も出来なくて困つてたんだよ。いやあ、助かつた」

「うちに娘がいるから、その気持ちは良くわかりますよ。お役に立てて良かった」

身体が弱く病氣がちの娘を思い出し、ブームは素直に頷いた。

実家に置いてきた妻と娘は、元気にやつていいだろうか？

拙い字で一生懸命書いたと思われる娘の手紙がたまに来るが、六ヶ月も顔を見ていないとさすがに寂しくなつてくる。

「娘も元気になつたし、これでようやく本格的に仕事が出来るよ。ブームさんも、店を大きくしたくなつたら言ってくれ。あなたの店なら……」

そう言つてゴウンはばぐるりと店を見渡した。

「そうだな、十五……いや、十万カリムで請け負うよ」

どうせならタダでやつて欲しいのだが、さすがにそこまではムリだろう。

「あはは、あんた商売上手だな」

ブームは笑つて自分の考えを吹き飛ばした。

今まで店の改装については考えた事がなかつたが、この前のオーナーの一件が町中に知れ渡つたようで、仕入れから帰つてきてからは客の入りが良くなつていた。

この調子で客足が伸びたら、今の店では商品が足りなくなるだろう。懐も温かくなつてきた事だし、ここいらで店を大きくしてもよさそうだ。

「じゃあ、早速店の増築を頼みたいのだが」

「おー、いいねえ。書は急げって言うからな。人を呼んで明日まで

にデカイ店にしてみせるぜ！ あんたは一日休んでくれ」
ゴウンはそう言つときびすを返し、「ガランゴロン」と盛大な鐘の音を響かせ店を出て行つた。

「相変わらず忙しい人だな……」

ブームは鳴り止まない扉の鐘を見つめ、ボソッと呟いた。

こうしてブームの店は次第に大きくなつていつた。近い将来、ブームがレッドドラゴンを倒し国の英雄として扱われる事になるとは、モノリス國の誰もが予想すらしなかつたことである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0329d/>

The Shop@ブームの冒険

2010年10月9日15時53分発行